
dual

T.D.W.

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

dual

【Nコード】

N1490Y

【作者名】

T・D・W・

【あらすじ】

100年あまり前、東の国イニトルタモベと西の国アンダキタサは長い戦争の末に終戦協定を結んだ。あまりにも長かった戦争はお互いの国をただただ疲弊させただけだった。

終戦から100年、平穏が始まったばかりの両国で再燃しようとする戦火。

これは原因となる人物と全く不要員な人物が奮闘する物語である。

今日（前書き）

お初です、T・D・W・といいます。初作品・初投稿です。
誤字・脱字・アドバイス・感想など、何かしら頂ける場合には
ぜひとも感想にてよろしくお願いします
そしてあまりにも拙いですが、ご容赦下さい。

それでは始まります。

今日

理由なんて聞いてはいない

必要がない上に”あれ”に興味がないからだ。

ただ、いつもの様に与えられた事を確実にこなせばいい。

それだけの事だ。

自分には「力」があるし、そこから来る絶対的自信もある。

では何故。

何故、自分はこんなにも焦っているのか。

知りたくない。

解りたくない。

認めたくない。

だが、既に気づいてしまっている。

事は単純明快。

自分に絶対的自信を持たせてくれる「力」が通じない。

それだけの事だった。

とある友人の話だ。

彼は、ことあるごとに自分の事を落ちこぼれと言っていた。

努力は人一番していたし、成績も悪くなかったのにも関わらずだ。
別の友人が彼に質問をした。

『何故そこまで自分を卑下するのか』

期待に応えられてないから。と、彼は答えた。

彼には二人の妹がいた。

彼女らはとても優秀で「力」も持っていた。

彼は妹達と比べられ、自分の親から落ちこぼれと呼ばれていたのだ。

彼は、努力は必ずしも報われるものではないという事を知っていた。

彼は、自分の凡庸さを知っていた。

彼は、この世界の「力」ある者の理不尽さを知っていた。

しかし絶望はしていなかった。

この世界の理不尽さは、誰もが知っている事だからだ。

「力」をもたなき者の方が多いからだ。

そして何より彼は、もたなき者側に立っている事に幸せを感じていたからだった。

ところがある日、彼は姿を消した。

抗った結果の事ではあった。

彼は絶望したのだ。

自分が、

「ちょおおっと待っててくれい」

酷く酒臭い息を吐きながら、中年の男が話を止めてきた。
顔は赤く染まり、いい感じに酔っ払っている。

「いやあくなにか面白い話をしてくれえって頼んだのは俺だがよ
お・・・兄ちゃん。」

正直、これはねえぜ」

「なにが無いんだなにが。後4～5文字程度でクライマックスだったのを

止められたんだぞ？俺の方がそのセリフを吐きなくなるわ」

「いやいや兄ちゃん。これだと全くもって微妙な気持ちにしかかなん
ねえからなあ

ホントもう、初対面の酒の席で聞くような話じゃねえから」

「その初対面さんに無茶ぶりしてきたのはそっちじゃね？」

「そうは言ってもよう・・・もっと・・・他にあんだろつがよう・・・
コレの話とかよう」

酔っ払いは右手の小指を立てながらニヤニヤしていた。

正直、とても殴りたくなるような顔だ。

「あゝ俺マジ無理なんだわそれ。鳥肌から冷や汗から色々抑えない
といけなくなる

まあそもそも、そういうの出来た事ないから話そうにも話せないしなっ」

「ドヤ顔しながら言うことじゃねえぜ兄ちゃん……
顔は悪くないんだから頑張りなよなあ、うかうかしてると魔法使いになっちまうぜえ」

「むしろその都市伝説的な力を手に入れてやるよ俺は」

町に数多くある酒場の中の一軒

ふらりと暇つぶし程度に一杯やろうと思ったのが
そもそもの間違いだったのかもしれない。カウンター席に1人で座
った結果、

同じように1人酒していたこの中年に絡まれているわけだ。

「しかしなあさっきの話だけどな兄ちゃん。お前さんはあれかい？
上級学校出なのかい？」

「おっさん名推理だなー。ま、成績の良し悪しとか話しに出してたらわかるか」

「いやあー、上級学校の卒業生となっちゃあこりゃあ、俺の首が飛びかねない

身分の方だったりするんじゃないか？ まあいいかー！　ワハハ

「ハハ！！」

と、目の前の中年は豪快に笑った。

絶対、素面になった時後悔するタイプだろう。

「安心しなよ、ただのブー太郎。ルーツ・レス（根無し）だよ」

「上級学校卒業のルーツ・レス？　おいおい、冗談だろう！？その話が本当なら

落ちこぼれは友人じゃなくて兄ちゃんの方だなあ！　ワハハハ！

「！」

「・・・」

ぐうの音も出ないとはこの事だろうと思う。言い返そうにも言い返せない。

だが、ここは我が尊厳を守るために！！

「よかるう、ならば戦う」

「ところで兄ちゃん、あれえ見ろよ」

「・・・あなたはとりあえず人の話を聞け酔っ払い」

中年が指差したのはカウンター席の一番端。

一人のフードをかぶった人物がいた。

あからさまに怪しい。だがこの酔っ払いはなんでわざわざそんな事を俺に伝え、

「グラスをシャーってやって飲みな俺の奢りだ（キリッ）って出来んじゃね!？」

出来んじゃね!？」

「やらねえよ!そしてなにその顔ウザっ!」

「おじさん一回やってみたかったんだよねアレ。よしやろう!マスター!」

とびつきり強い頼む!」

「ねえやめよう。マジ今更古いよそれ、マスターあんたも酒出してんじゃないよ

っていうかマスターが直接渡して『あちらのお客様からです（キリッ）って

やったほうがつてあああああああああ!」

グラスに入れられた酒は、中年の手から離れカウンター席を滑る様

に一直線向かいながら
フードの人物の場所へと、

「よっしゃあ!!」

丁度止まる訳もなく、フードの人物の手へ直撃。グラスは倒れ酒は服を濡らした。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」つじやねえよオッサアン!!なんかもう色々予想通りだよ!

あれ?なんで指を俺に向けててんの?おいやめる勘違いされんだろ。

あれ?ねえあのフードの人、グラス持ってこっち振りかぶってない?

あれ?俺狙ってない?おいおいそこのアンタ!真犯人は他にぶっ!!」

結論、今日は厄日である。

今日（後書き）

チラシの裏は両面刷りなので書けませんでした。

三日前

私は国の為に生き、国民の為にこの生を使うものだと思っていた。幼い頃からそう育てられていたし、私自信もそれに対して疑問を抱いた事など無かった。

今でもその考えは変わっていないし、その為に出来ることはしようと思っている。

100年あまり前、この国イニトルタモベと西の国アンダキタサは長い戦争の末に停戦協定を結んだ。

あまりにも長かった戦争はお互いの国をただただ疲弊させただけだった。

多くの人が国の為に死んでいったのだろう。それはこの国だけでは無く、隣の国もまた同じだ。

私は戦争を文献でしか知らない。

けども、これは繰り返してはいけない歴史だ。

停戦から100年で両国の間のわだかまりは薄れつつある。

もう一度戦争を起こしてはならない。だから私は、

「こんな所で捕まる気もないし、お前達だって簡単に連れ戻せるとは思っ

ていないんでしょう?」

挑発的に目の前の者達に問う。ここで引き下がる訳にはいかない。

「国王様からの命令です。どうかお戻り下さい」

二トル街道。見晴らしがよく、所々に緑がある王都と衛星都市を繋ぐ街道だ

その行く道を遮る者は5人。どれも見覚えのある近衛兵である。恐らく偶々、街道へと出ていたのだろう。でなければ追っ手としては早すぎる。

「断る。と言ったはずです。道を開けなさい」

「なりません。ほどなくすれば」

「増援もやってきて無理やり連れて行かれる事になりますよ、とても繋げますか？」

「・・・・・・・・・・」

相手方の人員がこれ以上増えてしまうのは避けたい。
だとすれば目の前の者達を打ち倒してでも、ここを通るしかない
結局、争いことは避けられない。

「お願いでございます姫様。わたし達は連れ戻せとしか命令を受け
ていません。

姫様がどのような理由で城を出られたかは存じ上げませんが、
この近辺には凶暴な魔物も存在します。我々と共に城へお戻りく
ださい」

この者達は知る由も無いだろう。私が連れ戻される事によって
何が起ころうとしているのかを。

あの父、国王の考えを私はどうしても受け入れる事は出来ない。

「不本意ですがしかたありませんね、私はここで捕まる訳にはいき
ません。

武で争う事を良しといたくありませんが……これで決めま
しょう」

そう言って、腰から下げた剣を鞘から引き抜いた。

「お戯れを・・・」

「あら、私は本気ですよ？ それにお前達は”あの”上級学校を卒業したのでしょう？

聞いています『欲しいものは勝ち取れ』 実にシンプルでわかりやすい校風ね」

国に直接属する職は大抵上級学校の卒業生だ。この者達もそうだろう。

全くもって共感出来ない考えの校風だが、今はかえって好都合だ。

「よろしいのですか？我々は遊びできている訳ではありません。ここにいる5名全員で

姫様のお相手をいたします。お怪我をなさる事だつてあるかもしれませんよ」

「構いません。それがお前達の仕事でしょう。では、いきますよ・・・」

”呼吸をし”大気中にある『気』を体に取り込む。

イメージするは血液。体中に駆け巡らせ馴染ませる。体は器であり、気でもって満たさせる。

器が大きいければ大きいほど取り込む『気』は多くなり、得られる恩恵は比例していく。

大きく変わるは身体能力。

さらにイメージ。体中に満ちた気を、手から剣へと流す。

通常、器でないものに気は満ちない。しかし、この剣は例外だ。

「先ほどから気になっていましたが、やはりそれは気留石の剣ではありませんか！！

姫様何処でそれを！？」

「頂戴しました。独立機動七師団隊の訓練場からね」

気留石とはその名の通り気を留めておくことの出来る石だ。

石の質によって留める量は異なるが、この石で作られた武具は使用者の力量次第で

性能の差が大きく変わる。

「ちっ！・・・やむおえん。総員戦闘用意！！ 姫様を捕縛する！」

先ほどまでの穏やかさが無くなり、一瞬で空気が張り詰める。

この場にいる全員がそれぞれ『氣』を取り込み、ぶつかり合おうとしているのだ。

幼少の頃からそこそこ武技の稽古はしていたが、やはり実践では勝手が違う。

胸の動悸は激しくなり、体が熱い。

こういった時こそ思考は冷静に・・・冷静に状況を把握しなければ・・・

槍兵3名に剣兵2名。相手は洗練された近衛兵であり、

当然の如く”軍御用達”である武具は、

氣留石で出来たものだ。同じ物を持って初めてわかったが、氣を纏ったこれらの武具は

全くもってやっかいだ。

囲まれば終わりな上に、1人と鏑迫り合いなどすれば、

この広い場所で私の武技の力量では後ろからズバっ。で終わりだろう。対応は困難だ。

槍兵との間合いも氣をつけねばいけない。

囲まれないような立ち回りをしながら鏑迫り合い、打ち合いをせず一撃で行動不能にさせる。

5名全て打ち倒す必要は無い。突破口を開き、そこから強引に抜けられれば私の軽装と

彼らの甲冑姿では重量が違う。どうにか逃げ切れるだろう。

「姫様ご覚

んなつ!？」

という訳で先手必勝といかせて貰う。

囲みながら徐々に距離を詰めて包囲態勢を整え、
後は号令をかけるだけであつただろう近衛兵の

1人の元へと『気』によつて向上した脚力で一気に距離を詰める。

剣を振り上げ、袈裟切り。

イメージする。切れ味は鈍く、衝撃を特化。

『気』で覆われた剣の性質を変え、近衛兵に向かって振り下ろす。

これは完全に決まつ……。たのは槍の柄、丁度中央からボキッと音を立て折れた。

槍は柄の部分まで気留石でない為『気』を纏う事が出来ない。

故にこちらの剣を受けきる事が出来ず、折れたのだ。

意表を衝かれながらも、咄嗟に槍を正面に持つてくることでの防御。
それに若干攻撃を受け流すという荒業。

槍ごと本人にまでダメージを与える事は出来なかった。

流石は我が国の近衛兵だ、素晴らしい。

なんていう称賛をしている場合ではない。

周りの近衛兵を確認する。

まだ距離がある……いける！

槍を折られた近衛兵はよるめきながら後退しようとしていた。

その後を追うようにして追撃。

足を一步踏み込み、全力で剣を横に振りぬく。

「つつつあああつ……！！！」

剣は近衛兵の腹部へと直撃し、その体を弾き飛ばす。

手に少しばかりの衝撃。甲冑越しであったが大分ダメージを与えただろう。

お互いに『気』で強化された体はほぼイーブンのはず、それでもってこの威力。

やはり気留石の武器は恐ろしい。

しかしこれで、突破口は開けた。

「では、皆さん。ごきげんよう」

“仮面越し”ではあるがにこやかに告げ、この場から全力で離脱するべく、

[illegible]

地響きと共に、大地が揺れていた。

「え、援軍だ！ 援軍がきたぞ！」

「なんて数の騎兵隊だ．．．姫様１人の為だけに．．．」

「それより、隊長を非難させるぞ！ あれじゃ俺らまで巻き込まれかねない！！」

近衛兵達が驚き、うろたえるのも無理は無い。

王都からの街道を大きな砂埃を巻き上げる程の大群。

数は千騎程いるのではないだろうか。

あれ全てが”私だけの為”に向けられた追っ手なのだ。

この道は衛星都市に続くまでずっと見晴らしの良い陸路だ。

身を隠せる場所も少なく、そもそも徒歩と騎兵では機動性が違いすぎる。

父は、私が戦を疎むのを知っている。私が国民を愛しているのを知っている。

私の「力」を知っている。

父は無能の王では無い。ただ1人の為に千騎もの騎兵隊を追っ手として出したのは

私が国民に向けて「力」を使わないと確信しているからだろう。

怒りで全身が震えた。しかし頭の何処かでは父ならやりかねないと冷静な自分もいる。

彼らは1000人の戦力では無く、1000人の人質。

これは父の出した答えであり、私に対するメッセージだろう。

（わたしは本気だ。娘よ、お前は どうする？）

やるべき事は決めてきたのだ。

ならば私の全てを持ってこれに応えねばならない。

だから私は。

「私は
！」

「お伝えします・・・騎兵隊千騎がただ今帰還したとの事です」

「ほう、全騎戻ってきたか・・・して、あれは大人しく戻ってきたのか？」

「いえ・・・それが・・・」

「フフ・・・やはりか。あのバカめ」

彼は笑う。
娘の出した応えに笑う。

「おい、聞いたかよこの間の話！」

「

「なにがって、騎兵隊だよ騎兵隊！ この間大勢で何処か向かってただろう。

見なかったのか？」

「

「まあいいわ・・・それがさ、医療隊のダチに聞いた話なんだけど、出動した騎兵隊全員が病休を取って休んでるんだとさ」

「

「それが怪我じゃないんだって！ 全員無傷で帰還したらしい」

「

「だろ？おかしいよな！ 俺もそう思ってたつ込んだんだよ、そして
たらさ……」

「

「全員が全員ガタガタ震えながらこう言ってたんだよ。

『化け物……仮面姫……化け物』ってな！

こうなのが都市伝説になってくんだよな！ 恐怖！仮面姫の謎
！って」

「

「しっかしあれだなー。仮面姫って……なんだ？」

「やっと！……着きました！！」

ニトル街道を2日かけて抜けた先、衛星都市カシゴテンオ。

この2日間の旅は私の想像絶するものだった。

知識として野宿というのは知っていたが、地面の寝心地は最悪。

夜の寒さは、身を隠すために着てきたフードでなんとか凌げたが、食料として持ってきたパンは真っ黒にカビ化。

パンが無ければ、お菓子を……と呟いていた時は、
って誰もいないじゃない。と、一人で自分自身にツツコミを入れた。

水は底をつくし、雨が振らなければ本当に危なかったかもしれない。
トイレも危なかった。ただただ広がる陸路で、おろおろ　おろおろ。
事を済ませた後は密かに泣いた。お姫様レベルも4つくらい下がっただろう。

そして何より！ 何よりお風呂が無いのがもう許せない。
体は汗でドロドロ。髪はベタベタ。

一刻も早く宿を取り、お風呂に入りたい。

そしていい感じに減っているお腹を満たして、情報収集といこう。

私は世間一般の常識がかけっていると自覚している。

これからは外で生活しなければならぬのだ、いつまでもお姫様気分ではられない。

まずは常識を学んで地盤を固め、これからについてじっくり考える。
これが今私が出来る最善だろう。

よし、考えがまとまった所でひとまず宿屋を探す事にしよう。

やっぱ、情報収集の場所はオーソドックスに酒場だろうか？そう本で読んだ事があるし。

そんな事を考えながら私は、カシゴテンオの街へと足を踏み入れた。

1ヶ月前？

ザワザワ・・・ザワザワ・・・ザワザワ・・・

周りの喧騒が激しい。

無理もない。というより、俺が表だってザワザワ言いたいくらいだ。

長期的休みが明けて、久しぶりの登校初日。

学校の第3ホール。200名の同学年達が一斉に集まっていた。

6年間ある学校生活最後の年。

自らの成績と実績を存分に前面に出しての、就職戦争は中盤戦にさしかかった。

我先にと、良い職にありつこうとする者が大半いる中、

親のコネやまたそれに準ずる何かで既に職につけている者もいる訳で、

世はまさに大・・・（以下自主規制

そして今、とある就職戦争の一つが終戦を迎えた。

『独立機動七師団隊 第一師団』

この国イニトルタモベで一番有名な部隊名である。

その入隊試験が今回、何年かぶりに行われたのだ。

いつその名を囁んでもおかしくない部隊名だなという感想しか沸か

ないが、
就活戦隊6年ジャーの前で、それはまさしく新たなる境地。
というか、マジで冗談無しにヒーローになれる。そんな就職先である。

で、現在ここに集まっている理由は一つ。

合格発表。

6年ジャーもとい6回生は全員で200名いる訳で、
単純に番号が200番まであるのだが、
張り出されていた番号はたったの一つ。

『81番』

どう見ても俺の番号である。しかもめちゃくちゃでかく表示され張り出されていた。

我が軍は圧倒的ではないか、流石だぜ俺。

なんて思っている場合では無い。
ここから早く逃げなければ捕ま、

「逃がさんぞ、81番らんらん！」

既に数人に囲まれていた。

手にはそれぞれインクのついたペンが握られている

それで何をするつもりだ。おい先をこっちに向けるんじゃないやめろ。

合格発表しか無いはずなのに何故持っている筆記用具！

「退路を塞げえ！！」

「出口の施錠完了お！！！」

「**囲め囲め囲めえ！！**」

「喉は潰すなよ！ 情報を吐かせてからだ！！」

悪の軍団ここに推参である。

6年間で培った経験をここにきてまで発揮する事はないんじゃないかと思う。

「合図をしたらペンを投擲！！ 諸君！奴の履歴書を黒く塗りつぶしてやれ！！」

「「「オオオオオオオオ！！！！」」」

もはや言っている事も意味不明であり、なんなんだこのテンション。お前から周り見ろよ、雌ぶ・・・女子の方達が引いているぞ。ここは一つ、説得を試みるしかない。

「いいかお前らー、まずは落ちつ」投擲開始iiiiiii！！」話を聞けやあああつ！！」

せまり来るは大量のインク付きペン。
四方八方から飛んできており、避けられそうにもない。

「おのれえええええ6年ジャーあああああああ」

結論、今日は厄日である。

「酷い目にあつた……」

制服の所々についている点々からちよつと垂れた様なあとから全てがインクだ。

あれからすぐさまトイレに向かい、水で濡らしたのだが全然落ちない。

そして、濡れた制服が冷たい。教室の空気も冷たい……。

「ああ……お前……汚されちゃったんだな」

「いちいち言い回しがキモイ!!　そもそも先導!そして統率!全てお前だろうが!!」

いきなり声を大きくした為に数名が俺の方を見てきたが、そんな事気にしていられない。

というか叫びたくもなる。目の前にいるこのふざけた野郎こそ、先ほどの主犯。

ロワイン・バイエこと、俺のクラスメイト。

「そりゃあ、発狂もするわ。独立機動隊ってだけでえらい事なのに、その中の第一師団だぞ？軍の花形！エリート街道まっしぐら！羨むなつてのが無理があるっつの。」

「っわけで、試験の時どんな感じだったのか詳しく話せやコラ」

「だから・・・このやりとりも何回目だよ、言ったる普通だったって！」

「お前らと一緒にだよ一緒」

「俺も何回でも言おう。一緒ならお前が受かってる道理が通らん。とな！」

実際の所、試験内容は本当に一緒だったのだ。

試験課題が一緒なのは当たり前な話だが、俺が言っているのは『内容が一緒』

簡単に要約すると、

「実技でボコられた上に、その後の面接でボコられた感想を言わさ

れた。

何かお前と違う所あるか？ この説明自体も何人に言っただかわかんねーよホント」

「ああ、悲しいくらい一緒だよ。だがしかしっ！実の所、お前は隠していた実力があつて

『ククク・・・俺を本気にさせた奴は久しぶりだ。

いいだろう本当の力と言うものが何なのか教えてやる。

さあ始めようか・・・今から俺がお前の試験管だ（裏声）』

なんて事を言いながら右手の力を開 放！！！！みたいな事をやっ

、
」

「ったわけねーだろ！！恥ずかしい！その振り付けは見ててとても恥ずかしいです！」

「そうじゃないと説明つかねーっつの！ いいから隠された能力発揮しろやあっ！！」

「上等おお！！冬休み中じいちゃんのとこでようやく習得した座禅技術見せたるわあ！！」

「ちよつ座り方やばっ！！どうなってんだよそれ！？
美しいってレベルじゃねえぞ・・・お前まさかその綺麗すぎる姿勢で

『ククク・・・俺を本気にさせた奴は』 ってのを！！！！」

「座りながら！？ シュールすぎるっ！」

「貴様ら、授業は始まっているんだが？ これは反逆行為として受け取っても構わないんだな？」

冷や汗がブワッと吹き出た。

『蛇に睨まれた蛙』という言葉が”古代語”としてあるが、その言葉の如くと言った感じ。

突如横に現れたのは我がクラス担当の教官。

騒ぎすぎた為に気づくのが遅れた俺らのミスだ。

逆らえばどんなペナルティが与えられるかわからない。

無論、授業妨害など言語道断である。

6年間という期間の中で調教された身はもはや強張るばかりで・・・

否！

動かせ身体を！！

出すんだ全力を！！！！

『所詮この世は弱肉強食。弱い者は死に、強い者が生き残る』

なんて、大昔にミイラみたいな男が唱えていたという伝承がある。

俺は・・・強者になる！！

腕は水平にビシッと決める。

指はビシッと相手を指す。

当然、姿勢の正しさは修行の成果を発揮している。

後は声を高らかに、強く、伝わりやすく、そして丁寧に！！！！

今ここに顕現しろ、絶望の状況を打破せし希望の言霊よ！！

「全て、こいつのせいです！！！！！！！！」（こいつのせいですつのせいですせいです）

改心の一言を解き放った。

若干スベった感があり、周りのドン引きっぷりも感じるがまあいいだろう・・・。

残響効果をも付加したこの言霊は脳内に響き渡り、我に希望をもたらせてくれる。

完全 勝利・・・ククク・・・ハハハ・・・ハアツーツハツハツハ！！！！

「ねえ今どんな気持ち？どんな気持ち？自分だけ助かるうしたのに
自分だけ罰を受けるのってねえどんな気持ち？ねえねえったらね
え」

笑いを堪えきれていないロワインの顔が目の前にあった。

「友人だけに罪を押し付けるとは何事だ！！恥を知れっ！！」

俺の渾身の言い訳を聞き取った教官はそう怒鳴ると、遠慮なく手に
持っていた警棒で

俺の横つ面を強打。

若干気を失いかかった俺はそのまま成すすべなく、ズルズルと体を引きずられ

廊下へと連れて行かれると、強制的に正座させられた。

しかも膝の上には、氣留石で出来た別名『懲罰板』と呼ばれる薄い正方形の板を載せて。

「ぎりぎり貴様が耐えられる重さまで、私の気を貯めておいた。気が抜けるのに

大体1時間くらい必要だろう。それまでそこに座っている……いいな？」

逆らえば何をされるかわからない。

肯定の答えを出すしかない。

気の力で身体強化を図り、重さに耐える事だって出来るが、過去にそれを行った生徒は星になったそうだ。

「ほらどうした？・・・膝が震えているぞ？」

やけに声を低くして挑発してくるアホが本当にウザイ。そうだし力トしよう。

しかし、未だに信じられんが・・・何で独立機動隊の試験に俺だけが合格した？

自分で言うのもあれだが、今いる6回生の中で成績は良い方だと思う。

が、あくまで良い方であって俺より上は普通にいる。

このアホが言うように、本当に俺は特別な事をしただろうか？

冬休みに入る直前にあった入隊試験。丁度俺がある事で絶望している時だ。

「次！ 82番入れ！」

流れ作業の様に試験は行われていた。

試験内容は1分間の間に自分の得意な得物をもって、試験官と模擬試合する。

ちよつと小さかったが、待ち時間の間生徒の呻き声と絶叫しか聞こえてこなかった。

1分も経たずして終わった試験もあったんじゃないかと思う。

どんな戦闘が繰り広げられてるかは簡単に想像出来た。

元々やる気自体無かったので、番号を呼ばれてからもなんかどうでもいいやって感じのまま試験会場へと足を踏み入れた

訳だ。

第1アリーナと呼ばれるその場所は、学園長が己の趣味で造らせた円形の闘技場だ。

上級学校に在籍する全ての人間が入ると言われる広大な観客席は無人。

アリーナ中央にある闘技場の中心にポツンと一つの人影があるだけだった。

人影はこう言った。

「闘技場に足を踏み入れた瞬間に試験は開始する」と

だが俺はそれどころ・・・試験どころでは無かった。

「時間がもつたない。早く上がってきなさい」

人影は俺をせかしていた。

だが俺は本当にそれどころでは無かったのだ。

冷や汗が額、首、背中、いや、もはや体中全てにびっしりと湧き出していた。

それでも一歩ずつ中央の闘技場を目指したのは、

あの時の俺は本当にどうかしていたんだろう。
さっさとあの場から逃げれば良かったのだ。

冷や汗は一向に止まらなかった。

あの時の場景を例えるならそうだな・・・急な便意に襲われているが

それを行う事が出来ないだがもうすぐ出そう！ そんな感じだった。

体中がヤバイと感じていた。

油断ではない、思い込んでいた訳だ俺は。

独立機動隊という有名な部隊だ。

試験官はめっちゃめっちゃゴツイ野郎で、生徒をぎつては投げ、ちぎつては投げしているんだろうな、と。
でもその人影は違った。

試験官は”女”だった。

気づいたら闘技場に足を踏み入っていた。

「試験を開始する」

うる覚えだがそう言っていたと思う。

瞬間、俺は闘技場の地面に体を叩き付けられていた。

一瞬とはああいう事を言うのだと思う。
今思い返してもあれはどうなっていたのか全くわからない。

とりあえず、その一撃で肺の空気が一気に持っていかれていた。
必死に酸素を取り入れよう口をパクパクさせていたのを覚えている。
でも俺はまだ”耐えられていた”

立ち上がり、女を見据えた。

女は最初の位置から1歩も動いてはいな、

と思った瞬間だった。

腹部に強烈な衝撃が走った。

感じただけで3発は貰っていたと思う。

いつの間にか、女は俺の背後で立っていた。

まだ”耐えられていた”

そこからは良く覚えていない。

俺が覚えているのは、ようやく終わった・・・という安堵感と、
アリーナをぼろぼろな体でびっこを引きながら寮へと帰った。とい
う事だけだ。

冷や汗は止まっていなかったが。

それかれ2日くらいして、今度は面接試験があり、

「模擬試合の感想はどうでしたか？」

と、眼鏡をかけた頭の良さそうな野郎が質問してきた訳だが、まだ回復しきれてない体だったので、

「とても痛かったです」

とだけ答えてその場から退出した。

それから冬休みに入り、じいちゃんの所である修行を頼み込んで目茶苦茶頑張った。

とりあえず絶望から少しでも抜け出そうと試みた訳だが、結局抗えず仕舞い。

まあある程度は精神的に持ち直したので、冬休みが終わって学校へ登校すると、

今朝の『81番』の張り紙。

全くもって理解不能だ。何をもって合格としたのか、やっぱり謎すぎるぞ独立機動隊。

「ほれほれえゝ 動けないな？動けないだろゝ ほれほれえゝ」

さっきからうざすぎるアホは、俺の両頬を片手で掴みタコの口みた
いなのを作っている。

丁度、懲罰板の重さが無くなったのでヒョイっと掴み、
それで振りかぶって角の所で 、

流石に可哀想だったので平面の方で勘弁してやったが、
ぶっ叩かれて奴は涙目になっていた。

「今しがた、脱走を確認した。よもやこのような行動を取るとはな・
・

シェリス・イリユーゲル、君には彼の追跡及び捕縛を頼みたい。
君の力なら難なくこなせるはずだ。お願い出来るかな？」

「お任せ下さい。我が愚兄は朝日が昇る前までに捕らえてみせまし
よう」

1ヶ月前？

夜の林道を疾走する。

上級学校の裏林。

林道というよりも、もはや獣道と言ったほうがいいくらいに道は荒れている。

草は腰程まで高く茂り、人の行く道を遮るかのように大きな岩がゴロゴロしている。

が、気の力によって格段に向上した身体能力は、少々の悪条件などものともしない。

しっかしまあ・・・こんな強行軍になるとは思ってもいなかった。

予定ではちゃんと卒業単位を取って卒業書を貰った上で、

行動するつもりだったんだが・・・。

「なに？入隊を辞退したいだと？貴様ふざけるのは顔だけにしろ」

流石我らが担当教官だ。痛烈すぎる。

6回生担当の教官が集まる教官室へと懲罰板を返しに来た俺は、ついでだったので

独立機動隊の入隊辞退を進言した。そして顔をけなされている、真顔でだ。

「今年の6回生の中で、お前は優秀な成績を修めている。これは周知の事実であり、

お前一人合格と言っても不自然さはあまり無いだろう。何が不服だ？」

「優秀と言っても、すぐく飛び抜けている訳でもありません。

このまま入隊した所で無様を晒すだけだと思っています！

学校にも迷惑がかかりそうですし、今ならまだ間に合います！」

「ふむ、言いたい所はとりあえずわかった。で、貴様の本音は？」

「とてつもなく面倒であります！！！」

グキヤッと嫌な音と共に腹にめり込むのは教官御用達の警棒。

しかも用途的に殴打する武器をあえて突きとして使うとは・・・

やめて下さい死んでしまいます。

「貴様一人の問題では無いのだ。これは学校の信用問題に関わってくる。

今回きりで入隊試験が行われなくなったら貴様はどう責任を取れ

る？」

「しかしながら教官。自分で言うのもあれですが、
このような根性の無い奴が入隊した所で学校の信用問題はガタ落ちだと思われます！」

「理由が薄い！！自分をもっと卑下してもう一度だ！！！！！！」

「しかしながら教官！自分で言うのもあれですが私のような根性が腐り、

顔もふざけた奴が入隊した所で学校の信用問題は、
、
」

「お前ならまだまだ出来る！！もう一度！！」

「きよおかぁん！！！！自分で言うのもあれですがあつ！！！！性根は腐り落ちい！

顔は卑しくう！道を歩けば人々からクスクスと笑われえ！！
制服もこのように染みだらけのこの私があ！
入隊させて貰った所で学校の信用問題はあ！
」

「入隊した後の事は知らん。お前を見出した第一師団の連中の目が節穴だった。

それで済ませればいい話だ。そんなに自分を卑下するな腐るぞ」

ありがたいお言葉に赤い涙が出そうだった。

「それに貴様にとってこれは大きなチャンスではないか。
あの生意気な小娘達の鼻っ柱を折るには絶好の機会だろう」

「生意気な小娘達って・・・一応この学校で唯一の・・・
いや二人だから唯一ではないか。
まあ、二人だけの飛び級者じゃないですか。優秀な人材ですよ非常
常だね」

「貴様・・・・・・・・まさかあの噂を真に受けてるんじゃないだろうな
？」

「あの噂？ちよつと多くてわからないですが、どの噂でしょうか」

「本当は兄の学年をも超えているが、我々教官達の配慮で同学年以
上の飛び級を
させていないという噂だよ。実にくだらんがな」

「え？それ本当の話じゃないんですか？」

「違うわ馬鹿者。確かに彼女達は非常に優秀な生徒かもしれないが、それは成績上であって経験がものを言う社会でクソ程にも役立たんわ。」

本人達は実家の方で十分経験を積んでますなどとぬかしているそうだが、
家にお膳立てされた経験など犬に食わせてしまえ！」

教官・・・妹達となんかあったんだろうか・・・尋常じゃねえ・・・。

「話がそれたな・・・とにかく辞退は許さん。とあえずは入隊しろ、

それからだったら辞めても構わん！いいな！」

交渉は決裂。

俺はいそいそと教官室から退出し、寮へと向かった。

で、今に至るわけだ。

要は、もう卒業まで待てません。俺は出て行きます！って事で脱走した。

あの部隊に入隊？冗談じゃない。

絶対にやっていけない自信が俺にはある。

上級学校上がりと言えば、高給取りで有名だがその夢は

1ヶ月くらい前に儚く散っている。

卒業後は、親父に反旗を翻す意味も込めて無職になってやろうと本気で思っていた所だ。

中退という形になってしまったが、一応学園長室の扉に退学届けを貼り付けてきたのできつと大丈夫だろう。

まあとりあえず当面の問題は、この先の路銀稼ぎはどうするか

、
なにかの気配がした。

数は・・・4・・・5？くらいだろうか。

確実にこっちに近づいてきている辺り、目標は俺なのだろう。、
こつ視界が悪いと接近されるまで視認出来ない、ほんとやっかいな地形である。

再度、気を体に取り込みながら腰の後ろに下げている小剣を引き抜いた。

草むらから少し頭を覗かせていた大岩の上に立って迎撃体制を取る。

まあこの森から逃げ出そうとした時からこれは想定の内だ。

なんせここは・・・、

「「「「ブルブルブルルッ！！！！」「」「」

こんな感じで唸り声を上げながら襲ってくるボア達が多く生息する場

所なのだ。

「「「ブルルルルル！！！」「」」

あいつらは結構凶暴な上に群れ単位で行動する生き物だ、
大きくなると1m近くにもなる。

「「「ブルルル！！！ブルル！！ブルル！！！！！！！」「」」

「

注意すべきは2本の大きな牙、あれに突き刺されたら痛いじゃないだろう。

「「「「ブルルッ！！ブルルッ！！ブルルルルルルルルルル！！！！」

ブルルルルルルルルルルルルッ！！！！」「」」

なにより雑食なのが頂けない。あれらは群れで人里を襲い農作物を

食い散らかす他、

偶に人までぺろっというてしまう。

前に野外訓練を行った時、通りがかった村で奴らと「ブルルアアアアアアアアアア！」

つて、

「うるせえ えええええええええええええええええつ！！！！！！！！！」

一匹のボアが草むらから飛び出て襲い掛かってきたので、横つ腹をおもつくそに蹴飛ばした。

完璧な手応えならぬ蹴り応えがあったので、あいつはもう行動不能と見ていいだろう。

視界が悪く、後何匹いるのか何処にいるのか正確に把握できない。

もはや面倒なので木を伝えて移動する……か……うわあ……

先ほどの奴とは比べ物にならない程の巨大なボアがゆっくりと暗闇から姿を現した。

目測5mはあるんじゃないかと思う。

ボアは大きくて1mくらいにしかない、目の前の奴はそれよりも遙かにデカイ。

規格外のやつ……つまりこいつは……、

[illegible]

魔獣と呼ばれる類の生物だ。

ヤバイヤバイヤバイもう何がヤバイかって、俺の相棒は脱走時に色々詰めてきた袋の中にあるし、それに手をつつこんで探し出し、黙々と装着する時間なんてコイツは与えてくれそうにもない。

そもそも何でこんな所に魔獣がいるんだふざけんな。

この辺に瘴気地帯なんて無いだろ！！

手元のこの小剣も、元々攻撃を受ける為のものであつて武器じゃない。
これであの2mはありそうな角を受けきる？ 無理無理、死んじやう。

逃げようにも魔獣相手じゃ確実に機動性はあつちが上だし、身を隠しても奴らの嗅覚ではすぐに見つかってしまう．．．ああ．．．

もうこれ．．．終わつた．．．。

恐らく30秒くらいであのデカいやつの腹の中におさまってるだろう。

人生終了のお知らせ

「だから貴方は落ちこぼれと言われるのです」

声とほぼ同時に、世界がズレた。

ように見えたのは、周りに茂っていた木や草、そしてボアと魔獣。それらが全て動きを止め、そして鋭利な刃物で斬られた様に寸断されたそれがズズズと流れるように落ちていったからだ。

圧倒的な迫力があつた魔獣は、体を斜めに切断され事切れている。木のせいで見晴らしが悪かったこの地形もかなりの広範囲にわたって切断され、

一本、また一本と倒れていく。草にいたってはもはや踝の位置くらいまでしか無い。

まるでかまいたちに遇つたようなこの状況。そして俺だけ無傷という事実。

結論。

完全に学園側からの追っ手であり、

「追うのに少々汗をかいてしまいました・・・若干イラつきますね」

5 回生の制服を身に纏い、完全に目下の人間を見るような目付きの

人物。

二人いる妹の内の上の方がそこにいた。

「こんなくだらない事はさっさと終わりにしたいので、迅速な対応をお願いします。

意味は理解出来ますね？大人しく連行されなさいという事です」

そんな場合では無い。

あの魔獣のせいでこいつの接近に気づけなかった・・・痛いミスだ。

冷や汗がヤバイ。

早くコイツから離れなければ・・・コイツ相手だと本当に・・・。

「ボーっと突っ立てないで早く行きますよ。朝までに戻らなければいけませんからね」

そう言って、俺の手を掴みグイッと引っ張ってくる。

俺の手を掴んできた？

俺の手を？

俺の、

「触ってんじゃねえええええええ!!!!!!」

叫んでいた。

無理だった。

耐えられなかった。

このクソ女……このクソみたいな女に……！！

「あゝもうマジでうぜえ！誰に断って俺に話しかけてるんだ？」

年上の人間に対する対応は習わなかったのか？人にものを頼む態度もただけねーよ。

「これだから女ってやつは……」

「あ？なんだよその目。あゝ出た。出ました！ お得意の” お前ごとき” が体制。」

下と決め付けていた相手にさ、逆らわれるといつもそういう態度取るよなお前。

治した方がいいぜーそれ、まあ日々の生活で培ったものだから
いっぺん人生やり直した方がいいかもしれんがな！」

「貴方こそ、さつきから誰に向かってものを言っているかわかっていますか。」

それに、言動に対して実力が伴わない相手をどうして敬う必要があるのでしょうか？

今の貴方はそれに大きく該当します。実に・・・不愉快です」

「お前の不愉快さなんて聞いてねーよ。俺に対してだけじゃねえ、自分より格下と認定した人間に対して、お前の態度は最低最悪だ。死んで詫びるべきレベルに達してる」

「飼い犬に噛まれる」とは古代人も良く言ったものです・・・こつという気分なんですネ・・・いいですか？これが最後の忠告です。

大人しく私の言う事を聞き入れ学校へと戻りなさい。

逆らえば容赦なく、徹底的に、貴方をボコボコにして連れて行きます」

袋から相棒を探す。

色々詰め込みすぎたせいでちよつとオイ何処にあるんだ・・・？

クソっ・・・ここか！ 相棒力モン！ 違う！？ ここか！？ 違う！？

「何をしているのですか、話を聞いているのでしょうか？私に従えと言っているのです」

ほんとペラペラと五月蠅い女だ。

「今なら先程の件は聞かなかった事にしてあげます。
お父様にも知らせる様な事もしません」

見つけた！！ 我が愛しき相棒よ…………でも相棒ならすぐ出てこいよホント
よし、さつさと手に嵌めてつ…………うし！これでやつとまともに戦れるってもんだ。

「ガントレット…………？ まさか本気で私相手に戦う気なんですか？
いきなり変わった言動といい、さては貴方別人？ もしくは狂って…………」

「いいや、お前のその無駄なプライドへし折って、目上に対する姿勢を教えてやる。

ついでにあれだな、女つてのは男より一歩下がってるくらいがいって事も教育だ。

少しばかり力あるからって調子にのりやがって」

「……………言いたい事はわかりました。どうやら直接的に調教し

なければいけないよう
ですね。本当に嘆かわしい・・・”弱い犬程良く吼える”・・・
まさしくその通りです」

「吐き気がするが同意見だ。知ってたか？会ってからの大部分が
喋ってるのお前の方って事をさ。ホント・・・良く吼える雌犬
さんだぜ」

言い切った瞬間、とてつもない殺気を叩きつけられた。
今ので完全に怒らせてしまったらしい。

男には勝てないと解っていてやらなければいけない時がある。
それが「力」持つ奴が相手でもだ。

こつちだつて”折角たがが外れたんだ”・・・その鼻柱・・・完
膚無きまで・・・、

「叩き潰してやるよ！！！」「制裁を加えます！！！」

右で持った小剣を前に構え、左手だけに嵌められた相棒はガントレットやや後方
に引いて
構える。

あいつが起こした、かまいたち現象の原因はわかっている。
それが俺達の家系の技であり、俺と妹達との埋められない実力差を

示した最初の原因だ。

『気鋼糸』と呼ばれる鋼と気留石を混ぜ合わせ、特殊な技術により糸状にし

限界まで研ぎ澄ましながら恐ろしい頑強性を兼ね備えた糸で、それを気を通す事で自在に操り、敵を殲滅する技。

家で代々引き継がれてきた武技であり、誇りでもある。

俺が8歳の頃1本の気鋼糸をも操れないのに対して、上の妹は当時5歳で5本の気鋼糸を自在に操った。下の妹も姉とまではいかないが、5歳の頃には3本まで操ることが出来ていた。

俺が特別劣っていた訳ではない、妹達が歴代の中で規格外だったのだ。

そして現在、俺の前方で攻撃態勢を取っている雌犬（上の妹）はというと……、

手に握られているのは一つの扇。

扇を構成する骨組み一つに対して、1本の気鋼糸が組み込まれている。

骨組みの数は12本、つまり気鋼糸も12本。

親父が操れる数は14本、歴代最高が18本

若干17歳にしてその数はやはり規格外。

そしてそれこそ雌犬（上の妹）が天狗になっている原因であり、他者を見下す要因だ。

「氣鋼系の才能が無いという事がわかった後、色々な武技に手を出しているとは聞いて

いましたが・・・これは滑稽ですね、剣と拳を使おうだなんてダジャレですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「だんまりですか・・・全くこれだから、」

「キャンキャン吼えるなよ雌犬」

「まだいいですか！覚悟なさい！！！」

雌犬が扇を振るった。

上下左右から1本1本が生き物のようにつねり、俺へと目掛けて襲ってくる氣鋼系。

この小剣は攻撃を受ける為の剣だが、あれ相手に受けるつもりは無い。

系に絡めとられ、最悪こちらを向く刃と化すからだ。

留まって迎撃すれば10本程度一度に相手にしなければいけない。

なら、自分から動き、移動した先の数本をかわせばいい。

雌犬の方へと全力で前進する。

前方からの2本をかわし、かわしきれなかった1本はガントレットで滑らせるように受け流す。

腕に巻きつかれる前に受け流す事で生まれた空間に入り込んで前へと離を詰める。

小剣を雌犬に向かって投擲。

気鋼系は一度振るえば中距離以上で圧倒的なアドバンテージを得るが、その一方で

接近されれば、長く伸ばしている分近距離での操作性が落ち、ちよつとした間が生まれてしまう。

それを防ぐために、1から2本程自分の周りで待機させているのだ。

ちよつとした間が勝負だ。

小剣を投げたのは防御を一枚でも崩すのが目的で、これからが完全に直感だが

雌犬は俺を舐めきっているので、自分の保身用気鋼系なんてせいぜいあって一本だろう。

投擲された剣は、当然の如く待機されていた気鋼系に防がれる。その間にさらに距離を詰める。

完全に俺の間合いに入った。

後は相棒で雌犬の顔面を思いっきりぶん殴るだけである。

呼吸をし、

気を再度取り込んで、相棒に集中させる。

左腕を振りかぶり、

左足から右の軸足に体重を移動させながら乗せて、

思いつきり、

顔を

！！

雌犬が笑っていた。

まるで、畏にかかったな、と言わんばかりの顔である。

俺の渾身の一撃をかわす用にして、体を横へと移動させ始めた。

滑らかな動きと言えば滑らかだが、はつきり言って動作が遅い。

これだと俺も単純にそれを追う形にしたら当てられる、全然回避になっ
てないのだ。

一体……なにがしたい？

ここで引く必要は無い。

所詮、相手は雌犬。

誰が上で誰が下かここで理解させる！！

そのまま薄ら笑いした雌犬の顔面に拳を叩きつけ、振りぬいた。
雌犬は盛大に茂みの中へと吹っ飛んでいく。

超絶にスカッとした。

手応えもバツチりだった。

が、疑問が残る。

何故雌犬はあの状況で笑っていた？

あんなに簡単と懐へもぐれるはずがないので、恐らく何か策があったはず。

そして何より雌犬の「力」を見なかった。

油断しすぎて使っていなかったのか……。

まあなんにせよ。

「俺の勝ちだな、そのままそこでおねんねしてくれ」

茂みの方に向かって決め顔をおいた。

1ヶ月前 ？（後書き）

改行ミス多発・・・
気をつけます。

1ヶ月前？

「はああああああ・・・良かった・・・俺、生きてるっ！！！」

開放感が半端なかった。

よもや、本当に勝てるとは思っていなかったのだ。

必死に抑えていた”アレ”が耐え切れなくなり

ああなってしまった事は、しょうがない・・・しょうがないんだが、命がいくつあっても足りないぞホント。

あれからというもの、

『ウォーミングアップは終わりましたか？さあ地獄を見せてあげますよ』

なんて考えてビクっ！！となり。

『考えが浅はかですね。これで本当に勝てると思っていたんですか？』

なんて考えてビクっ！！と小剣を構え。

『残像です』

なんて考えてビクっ！！と後ろを振り返る。

つてな感じな事を、

あいつが吹き飛んでいった茂みを見ながらしばらくの間やっていた。自慢では無いが、俺はあいつと一緒に訓練をしていた10年間の中で、

一回も勝った事が無い。

だからあれで終わりなんて思ってもみなく警戒するなっていうのが無理がある。

ここ数年は、親父に鋼糸を無理やり預けさせられたというのもあり、一緒に訓練や組み手なんてやった事なかったが、恐らく勝てなかっただろう。

今回あいつが負けた原因は、あの謎の行動だ。笑みを浮かべながら横にゆっくりと移動。その動きは、ただの変態にしか見えなかった。

いやけども、あれがあったからこそその勝利だろうこれは！！！！変態さんに感謝せねば。

つーわけで、例の茂みに入って横たわっていた雌い・・・上の妹を発見し、

小枝でツンツンとやって、安全性を確認してからあいつが殺った魔獣の血を

回りに撒いておいた。

これでこのボア達は近づかないだろう。

これはとてつもなく臭いからだ。

若干服にもついたけど気にしないでおこつ。

恐らく、一ヶ月は臭いが取れんがな！

戦った相手のアフターサービスもするなんて、俺優しすぎる……。

しかし、触られただけで抑えきれなくなるとは……、

俺の冬休みの修行はなんだったんだ一体……。

あれを抑えるために精神修行をじいちゃんにお願いして、必死にやった。

俺には隠している実力や、力なんてものは無い。

が、隠している事ならある。

今から約1ヶ月くらい前の話。

俺はいつもの用に自分のノルマ分の訓練をこなし、寮へと戻る途中だった。

いつもの光景、いつもの生活、いつもの帰り道だ。

この普通な事がとてつもなく幸せな事で、この人生に満足していた。そんないつも通りの事をしていただけの俺に、なんの前触れも無く、それはやってきた。

同顔見知りの女の子が反対の方向の道から歩いてきていた。女の子の方から挨拶してきたので、俺も何気なく挨拶をし返した。

と思ったら水平蹴りをして体勢を崩し、そこから押し倒して、

「そっちから話かけてくるとはとんだ雌猫だな・・・欲求不満なのかオイ」

なんて事を顔と顔が3cmくらいの距離で呟いていた。

何をやってるかわからねーと思うが俺も自分がわからなかった・・・

頭がどうにかなりs（自主規制

とりあえず素に戻った俺は、驚いて固まってしまっていた女の子を手刀で気絶させ、女子寮に送り届けて何事も無かったように振舞った。

それからというものの、女を見るととりあえず、押し倒したくなり、従わせたくなる。

生意気な女は、罵りたくなり、踏みつけたくなり、そしてやはり従わせたくなる。

一体俺はなんに目覚めてしまったのか。
心当たりは一つしかない。

古代語チェッカーという便利な道具がある。

ゴブレットの形をしたそれは、特殊な水で器を満たし、血を一滴垂らす事で、

自分に発現している「力」の名を水面に表示してくれる優れものだ。

大丈夫、俺はあっちが側では無い。
というか、俺はこっち側でいたい。

結論、その日は厄日となった。

「で、これからお前はどっしたいのじゃ？聞いている限りだとさっさと死んだ方が

良いとワシは思うがの」

「いやそこまでは・・・けど何もやる気が起こらない・・・こんなくならない力

なんて欲しくなかった・・・こんなじゃあ親父の部隊にすら・・・」

「入隊出来んじやろうな、むしろ普通の生活すら危ういわい。世界の半分を敵にしかねんからの、その理は・・・」

「じいちゃん俺どうすればいいかな？」

「言っておるじゃろ、死「酷くない！？愛弟子相手に死を勧めるとか酷くない！？」

「自分で道を見つけれん者に生きる意味など無いわい。逆境をバネにし生き抜いてこそその人生じゃ、考え方次第で人はどのようにも生きていける」

「考え方を変えるって……例えばどんな？」

「少しは自分で考えんか馬鹿者……そうじゃの例えばじゃが……
世界の半分が敵であろうとも、残りの半分は敵では無いとか……
かの」

「残りの半分って……まあそんな考えも出来るのか」

「それにの、親父さんの部隊に入隊出来ぬと言っておったが……
わしはの、

その事について喜んで良いと思っておる。

お前は家に囚われすぎじゃ、これを気にいっその事ルーツ・レス
にでもなって

世界をまわって来い。ワシ等の世代では出来なかった事が今は出
来るのじゃ、

それだけでも世界はお前が思っているより、お前に優しく出来て
おるからの」

涙が出そうだった。いや、もう若干ウル目だ。

師弟関係とは言え、じいちゃん……師匠は赤の他人である。

親族である親父や、妹達なんて比べ物にならないくらい親身になって俺の事を思ってくれ考えてくれている。

この人の存在だけで、俺は……………、

「ああ、あとの…………お前の人生はこれから、特殊な性癖の持ち主に会わん限り」

「…………出会わん…………限り？」

「魔法使いになる確率は100%じゃな」

涙腺が崩壊した。

今思い出しただけでも色々な意味で泣きたくなってくる。
暇があつたらまたじいちゃんのことによるとしよう。

もうすぐ林道を抜ける。

ここを抜ければ、ニトル街道だ。

そこからだと一番近くて大きい街は、衛生都市カシゴテンオ。
そこでとりあえず路銀稼ぎといこう。

大丈夫、なんとかなる。

なんせ、俺が思っているより世界は俺に優しいいらしいからな。

1ヶ月前 2・5

私よりも気鋼糸を操る才能が無く、それによって家での立場も弱いがそれとは別に兄なのだから妹に対して堂々としていれればいい。昔はそう思っていた。

必死に努力する兄を見ながら、私は適度に鍛錬を行っているだけでそれを軽く超えていってしまう。

自分が兄とは違い、特別なんだと考え始めたのはいつからだったかは覚えていない。

その時には既に兄妹の会話が無くなっていて、ほぼ他人。上官と部下という感じのやりとりしかなくなっていた。

上級学校に入学した15の年、父が言った一言でそれはもう会話だけの話では無くなった。

『卒業したらあいつを部下に就かせる。お前の方が三つ年下だが、私の見立てでは、

あいつよりも早く卒業出来るだろう。入隊順として見ても何も問題はない』

疑問は持たず、ただ受け入れた。

2回生を飛び越え、3回生になった上級学校2年目のある日
私に「力」が発現した。

持つ者と、持たぬ者とは人としての価値が大きく変わってくる程
の「力」

やはり私は特別だったのだ。

古代人が残した言葉。

それは古代人が世の理を文字で表現したものだ。

「力」の発現。

それはこの体に一つの理を得る事。

私に発現した「力」は気鋼糸を扱う者にとって非常に有益な力だった。

その理の名は『灯台下暗し』

遠くを照らす、近くは暗い。

この力を使ったとき、相手は近づくにつれて私を視認出来なくなる。

1 m圏内は全く見えないと言ってもいいだろう。

中距離以上の戦闘が得意な私にとって、これ程に近接特化した「力」を与えて

くれた神に感謝しなければならない。

やはり私は特別なのだ。

父の見立ては外れ、私は一つ遅れて卒業する事になった。

しかし、卒業後の予定は変わらないだろう。

兄は、私の部下としてこれから生きるになる。

これはもはや決定事項なのだ。

父に対して忠実な兄は、反論しないだろう。

だからか、学園長に呼び出しを受け依頼された時は少し驚いた。

何故飛び出したかは興味ないし、受けた事は確実にこなすが、

あれも父に逆らう様な行動を取るんだなと淡々と思った。

追いついた時には獣に取り囲まれていた、それに魔獣つき。

久しぶりに見た、あれは覚えている姿よりも若干大人になっている。

呆然としているのを見ると、魔獣相手に怖気づいているのだろう。

だから……、

「だから貴方は落ちこぼれと言われるのです」

罵ってやった。

追いかけるのに多少汗をかいたし、私の手を煩わせたのでイラついていた。

「手に触れるなあっ！……！！！」

そう叫ばれながら手を振り解かれた時は、一瞬体が強張ってしまった。

兄からこんな攻撃的な言葉を浴びせられた事が、過去に無かったからだ。

「あ？なんだよその目。あゝ出た。出ました！ お得意の”お前ごとき”が体制。

下と決め付けていた相手にさ、逆らわれるといつもそういう態度取るよなお前。

治した方がいいぜーそれ、まあ日々の生活で培ったものだから
いっぺん人生やり直した方がいいかもしれんがな！」

あまりにも不自然だった。
まるで人がかわったように目の前の兄は、攻撃的な表情と言葉で私を責め立てている。

「貴方こそ、さっきから誰に向かってものを言っているかわかっていますか。」

それに、言動に対して実力が伴わない相手をどうして敬う必要があるのでしょうか？

今の貴方はそれに大きく該当します。実に・・・不愉快です」

困惑もあつたが、一番強かつたのが怒りだった。

将来的とは言え、自分よりも下の人間が特別な私に齒向かうなどありえない。

これは調教しなければならない。

それがたとえ、実の兄だとしてもだ。

「・・・言いたい事はわかりました。どうやら直接的に調教しなければいけないよう

ですね。本当に嘆かわしい・・・”弱い犬程良く吼える”・・・まさしくその通りです」

「吐き気がするが同意見だ。知ってたか？会ってからの大部分が喋ってるのお前の方って事をさ。ホント・・・良く吼える雌犬さんだぜ」

頭の中で何かが切れる音がした。

あのような蔑んだ目、許せるわけが無い。

あのような不快な言葉、許せるわけが無い。

いいでしょう。

その思い上がった態度……私自らの手で　　ー、

「制裁を加えます！！！！」「叩き潰してやるよ！！！！」

兄の考えは読めている。

小剣を構え迎撃体制を取っているが、あれで私の気鋼系を捌くつもりは無いだろう。

私の扱える気鋼系は12本。

兄の扱える気鋼系は、恐らくその半分以下。

まともに気鋼系だけの争いだと部が悪くなる。

まあそもそも兄は、父に気鋼系を取られているので、

使おうにも無いのは使えない。

なので、気鋼系を扱う上で出来る弱点を突いて来るはずだ。

中距離以上で迎撃すれば10本以上相手にする事になる。

気鋼系を使う相手に対する定石は、一度放たれた気鋼系を見極めて避け、

距離を詰めて一気に勝負をつける。
兄はそれを狙ってくる。
これは確信だ。

ならばそこに罠を張る。

気鋼糸だけで屈服させるのもいいが、それではつまらない。
私をあそこまで愚弄したのだ。

その思い上がった考えを完膚なきまでにへし折る。
二度と逆らわないようにする為にも、絶対的な「力」でもって策ごと潰す。

扇を振るった。

『気鋼糸術・投網』

11本の気鋼糸それぞれに気を流し込み同時に、切れ味を鈍化させ、粘着性を付与する。

鋼糸に触れようものなら、それに張り付き絡み取る事で捕縛する武技だ。

放った鋼糸は兄の下へと向かって行く。

これで終わるようでは、本当にかっかりだが。

読み通り、距離を詰めてきた。

その先にある鋼糸は3本。

2本をさけられ、1本はガントレットで防がれた。
さらに私との距離を詰め、小剣を投擲。

恐らく兄は、こう考えているのではないだろうか、

『あいつは俺を舐めているから、近接用は1本しかない。』

小剣を防ぐ事でそれも無くなり、その間に懷に潜り込んで決める』

私は、兄の考えどおりに小剣を待機させておいた鋼糸で受け止めた。
さらに接近してきた兄は、気を取り込みガントレットに集中させている。

恐らく間合いに入っただろう。

笑いをこらえきれない。

面白いくらい私の思い通りに事が運んでいる。

兄は、私が誘い込んだこの状況に気づいているだろうか？

いや、気づいていないだろう。

一度勝ったと思わせ、それを打ち砕く。

私の絶対的な「力」で打ち砕く。

逆らう牙をこの手で打ち砕く。

『灯台下暗し』

心の中で呟いた。

これで兄は私を視認する事が出来ない。

なんせ、あの拳が届く距離まで近づいているのだから。

私はただゆっくりと横にでも移動するだけでいいだろう。

さて、これからどう制裁を加えようか。

今の兄は、もはやただのお人形さんだ。

とりあえず、鋼糸で縛り上げ腕の骨でも折っておこうか？

片耳だけ切り落としておこうか？

それとも先程から目が合い続けているその顔をぐるぐる巻きにして

強烈な違和感。

何故目が合い続けている？

何故拳は私の方へと向かってきている？

これではまるで……見えて……そんな訳ない！

では何故。

何故兄は、私を眼で追いかけてきてるのか……、

追いかけることが出来るのか。

まだ見える範囲？

そんな事は無い、十分この距離は有効範囲内だ。

「力」を使えていない？

そんな訳は無い、使っている感覚が私にはある。

では何故！？

とりあえず、鋼系を戻……………！！

またしても違和感。

兄は私の鋼系をガントレットで”受け止めていた”

何故、普通に防がれているのだろうか。

私は鋼系の切れ味を鈍化させ、粘着性を付与していた。

ならば、そこに鋼系が”ついて”いなければおかしいではないか。
何故そこで気づかなかった。

焦っている。

私は何故こんなに焦っている？

決まっている。

私の「力」が通じない。

ただ、それだけの事。

拳は眼前まで迫っていた。

策ごと完膚まで無きに打ち碎かれたのは、私の方だった。

1ヶ月前 2・5（後書き）

これにてプロローグは終わりです。

今日 ? (前書き)

第一章 始めさせていただきます。

今日？

街での最初の問題はお金だった。

城から抜け出す際に協力してくれた女中の者から、生きていくうえで絶対に必要な物と聞いていた。

彼女は、それに変わる物を私の部屋からいくつか選んでくれ、これを”質屋”と呼ばれる場所で換金して下さいと助言も貰った。

さらに彼女曰く、

「あまりにも高価な物を選ぶと、自ら危険を呼んでいる様なものなので

親を無くし、家にあった目につくお金になりそうな物を持ってきた没落貴族。

というコンセプトで選んでみました」

と自慢げな顔だったのを覚えている。

宿屋に着いた当初、そこではやはりお金が必要だったので、宿屋の主に質屋の場所を尋ねると、

「あそこは本当にお金に困った人しか訪れませんからね、足元を見られます。

銀行へ行つて、品を鑑定して貰い正当な金額で買い取ってもらう方が

良いでしょう。いや、そうすべきです！！！！！！」

と、奥から出てきたご夫人が物凄く熱弁しておられていたので、言う通りに銀行へと足を運んだ。

この銀行とやらは、ここ最近大きく成長した両替商の名前らしい。今やその規模は拡大していき、大きな街を対象に次々と設立されているという。

この街の人々の生活にも欠かせない場所となっているそうだ。

街の中心部に銀行は建っていた。
周りの建物と比べるとやや新しく、そして大きい。

中に入ると、信じられない速度で女の人が出てきて、対応をしてくれた。

換金なんてあつという間。

あれとあれよという感じで事が進み、
口座だの、預金だの初めて聞く言葉を延々と語られ、
現在お金を得る手段が無い事をポロつと口に出してしまった時には、
仕事の斡旋もやっているのでは非どうぞ、なんて凄く勢いで勧められた。

今回は換金目的の為だけにここに着たが、この銀行という場所はこれからの

生活を考えると、とても重要な施設になるだろう。

今は、やんごとなき事情で（早くお風呂に入りたい）

早急に宿屋へ戻らなければならぬが、
時間が出来たらゆっくりと話を聞いてみよう。

しかしながら、苦勞した思いでたどり着いた
この街カシゴテンオは本当に素晴らしい。

人々の活気、市場の多さ、治安の良さ、街の雰囲気がとても良い。

『木の葉を隠すなら森の中』という古代語がある。

ここは沢山の人間が集まる街だ、あまり長居は出来ないだろうが
暫く身を隠すにも適しているだろう。

そして何よりも……、

宿屋のお風呂がもう最高だ。

シンプルなデザインの一間に、

一人で入るのに広すぎず、狭すぎないという絶妙なバランスの浴
槽。

ヒノキの木材で出来たその造りは、独特な香りと安らぎを与えてく
れる。

浴槽に浸かった時に丁度視点の先に小さな小窓があり、

恐らく計算されて設置されているだろうその場所から見える景色も
また、

この場所の意居心地を良くする為の設計だろう。

この宿屋を経営している亭主夫婦も良いお人達で、
こんな素性も知らない私を快く長期滞在する許可をくれた。

こんな素晴らしい宿に、身を置く事が出来て私は幸せものだ。
ちなみに宿屋の名前が「質実剛健」だったのでこの場所を選らんだ
のだが、
なかなか私のチョイスも捨てたもんじゃないと思う。

余裕が出来たので、1日目からさっそく世間の一般常識を学ぶが為に
色々街を詮索。

次々にわかってくる城の外での生き方。

城の中では与えられるだけだった。

ここでは、自らが自らの意思で行動しなければ何も始まらない。
それがとても新鮮で充実感があつた。

情報収集（一般教養）の為に酒場に来るまでは。

日も落ちてきて、夕暮れ時となっていた。

お腹もすいたので、探索中に目星をつけていた店で晩御飯を済ませ
た時には

日は完全に沈み、辺りは暗くなっていた。

そろそろ頃合だろう。

酒場へ行こう、酒場へ。

文献で得た話だと、酒場は多くの人間が集まり沢山の話が酒の肴と
なっている。

それに耳を傾げるだけでも面白い話が聞けると書いてあった。
特に『ルーツ・レス（根無し）』と呼ばれる者達は、自国や他国を
飛び回っている

らしく、話題も豊富で彼等の体験談は大いに旅の役にたつという。

街には色々な酒場があつたが、なんせ人生で初めて入る場所だ。
最初から大きい酒場に行くような勇氣はなかったので、
こじんまりな酒場を選んだ。

中は少し薄暗く、つりランプ灯りがちらほらあるだけだった。
既に何人かの客がお酒を飲みながら、会話に華を咲かせている。

一人だったので、カウンター席を選んだのは無難な選択だろう。

ここからが本番である。

酒場に來たのだから当然、お酒を注文する事になる。

私はお酒を飲んだことが無い……。

というよりどんなお酒を頼めばいいのかもわからない。

店の亭主は私の注文を今か今かと待っている。

先程からチラチラと見ているので、そんな気がする。

よしここは……！！！！

「亭主、注文をお願いします」

亭主はこちらを向いただけだった。

無口なお人なのだろうか？……とにかく続けよう。

「女性にも優しいのを一つ」

そう頼んでみた。

亭主は後ろの棚から1本の瓶を取ってそれを開け、グラスに注いで差し出してきた。

これが……人生初のお酒……一体どんな味が……。
恐る恐る口にしてみると、

「美味しい……」

自然に声が出ていた。

飲み口がやさしく、スッキリして爽やか。

やわらかな香味とまろやかな……これほど美味しかったのか
お酒というものは。

あまりの美味しさだったのでおかわりを貰い、三杯程いった所で気づいた。

全く、周りの話を聞いていなかったことに。

完全に自分の世界に入ってしまった。

これはいけない……耳をすまして他の人達の会話に集む……、

「よっしゃあ!!」

そんな声が左の方から聞こえた。

と、思ったと同時に右手になにかぶつかって……、

冷たいと思った。

気づいたら服が濡れていた。

そこには倒れたグラスと、そこからこぼれただろうお酒。

なんなんだ、これは一体。

私がなにをした？何故この仕打ちを受けねばならない？

誰だこんな事をしたのは・・・！！

左の方を見ると、薄暗くて顔までは判断出来ないが、男が二人がいた。

一人は、こちらを見ながら無言でもう一人の方を指し、指をさされた男はカウンターから立ち、それを辞めさせようとあたふたしている。

どう見ても”あいつ”が犯人だ。

自分のしでかした事悪びれもせず、そしてそれを隠蔽しようとまでする。

最低な奴とはああいう男の事を言うのだろう。

やったらやり返すという連鎖は断ち切らなければならないが、人としての道理を教える為に、例外があってもいいだろう。

グラスを握る。

男を見据え、振りかぶる。

こっちに向かって何か叫んでいるがそんな事は知らない。

全力をもって、グラスをぶん投げた。

男達の方に歩みよる。

指をさしていた男の方は席を立てて何処かへと行ってしまった。
グラスを当てた方は、頭を抑えうずくまっている。

痛そうだったが、今はおいて置こう。この男に不満を言わねば気が
すまない。

「貴方には、自分が犯した罪に対して謝罪をするという気持ちはな
いのですか？」

ここは気持ちよくお酒を飲む場のはず。あのような振る舞いとて
も許せるよう

なものではありません」

「つつ．．．だから．．．真犯人は他にいるって．．．言っただ
ろうが．．．」

「自分の非を認めないのでですか．．．呆れてしまいますね」

「だから！！俺じゃねーって言ってるだろうが！！って．．．あれ
！？

オッサンは！？オッサン何処行っただの！？」

顔を上げて男が叫んだ。

見ると若く私と同世代くらいで、
護身用の物だろうが、腰の後ろの方に剣の柄が見える。

良く見ると顔はある程度整っており、髪も短髪に切りそろえられて
いて

清潔感があるが、服装が頂けない。

長めな黒色の外套は砂埃でうす汚れ、その外套から覗かせる衣服は
よれよれ

になっており、ある程度の外見はほぼマイナスの方向へと傾いてい
る。

「お連れの方なら、先程立ち去られました。

それよりも、店内に入る時は砂埃くらい払ったらどうですか。
他者に迷惑をかけるなど、誰かしらから教わったでしょう？
謝罪の気持ちも大事です。自分の非を認め、悔い改めなさい」

「なん・・・だと・・・あの野郎逃げたな・・・。

そして、なんという上から目線。

実際に自分で目撃していないのに犯人を決め付けてんじゃねーよ」

「初対面の相手に敬語も使うことが出来ないのですか・・・。

それに、犯人はいつも『俺はやっていない』と言い張るものです」

「あれ？なにこの母親と喧嘩している感覚。懐かしくて涙が・・・

ってちげーよ！だから俺じゃねーつつつてんだろ！？

そもそもアンタの方がよっぽど怪しいわ！なんだよそのフード姿に仮面。

後ろめたいっていう気持ちが生生活面に滲み出てんぞー！！」

「なっ！・・・これはやんごとなき事情の為、仕方ないのです。そもそも貴方はレディに対して配慮が足りません。

女性に外見的な面で指摘するなんて常識不足！そう、非常識人間です！」

「うっぜえええ・・・マジこの顔面上半分仮面女うっぜええ・・・」

・・・つくう！！！！・・・この男・・・頭に・・・きた！！！！

「貴方、常識が本当に足りてないわ！

そもそも、人の服を濡らしておきながら謝罪の言葉が無いっていう時点で非常識！

人が安らぐような場所で砂埃も払わず入ってくるのも最低最悪！おまけに服はよれよれでだらしが無い！恥を知らないっ！！！！

！！！！」

「それが素かこのクソ女！！自分の主観だけで犯人を決め付けるんじゃないねえ！

確信も無しにグラスを投げつけるアンタの方こそ非常識だし、そもそも！

この酒場自体俺みたいな人間が来ることが多いっつーの！！

それにアンタのその服も大概だぞ！？そんなヒラヒラしたのつけやがって

お嬢様はとつとお家に帰って優雅に紅茶でも啜ってる！」

「無礼な！身を弁えなさい！！！」

言い切ってからハツと気づいた。

頭に血が昇っているからか、安易に身分を知らせるような言葉を放ってしまった。

こんなくだらない事で、足がつくのは避けたいが・・・、

「なにが無礼だ。鏡を見てから言え！そいつ顔面の上半分に無礼なのつけてるから！」

深く考えない性質なのか、それとも何処かの令嬢だと思っているのか、

どちらでも良い・・・助かった。

だけでも・・・！！！！！！

「言っていい事と悪い事がある事くらい子供じゃないんだから分かるわよね・・・？」

そろそろ大概にしないと本気で、

「上半分女」

「・・・・・・・・はい？」

「いやだから、上半分女」

目の前の男は一体何を言っているのだろう。
理解が出来ない。

「顔面の上半分だけ仮面の女。長いから上半分女だ。何か文句あるか？」

冷静な時はくだらないと一蹴するような言葉。
実にくだらないと。
実際くだらない。
だけでも、私の理性を吹き飛ばす程度の威力をその時は孕んでいて・
・・・、

「ますたぁー、もう一杯だ・・・・俺はやれる・・・・やれるんだ俺は・・・・っえ・・」

私の隣で先程の若者がグラスを持ちながら、
気だるそうにカウンター席に突っ伏している。

「本当、強いのは口だけ・・・何が『お酒ですら俺には勝てねーよ』
ですって？」

鼻で笑うとはこの事よね」

数時間に言われた言葉で、私の怒りはどうやら頂点に達したようだった。

今までの人生の中で、食べ物を置く場所をあんなに強く叩いた事は無かったし・・・なにより・・・、

『もう言葉でなんてウンザリ。何かで決着をつけましょう、一体どちらが正しいか。』

それで文句無しになるような何かで！！！！』

と、あんな大声でもいつきり啖呵を切るなど・・・はしたない・・・。

またもやお姫様レベルが下がったのを感じた。

『上等だゴラあっ！！勝った暁には俺の身の潔白を証明するだけじゃ足りねえ！！』

代償はその体と仮面で払ってもらっからなっ！！！！！！』

と、男はもはやゲスの極みだったので、私の冷静さをさらに奪っていた。

ここが酒場という事もあり、なら酒の強さで勝負という事になった。同じ強さのお酒を同時に飲み、何杯で潰れるかの勝負。

彼は何十杯飲んだらうか。

私は何十杯飲んだらうか。

覚えてはいないが、とりあえず。

「ますたあああ……おかわりら……おかわりを……うええ」

私の勝ち間違いない。

何故かは知らないが、全くといって良いほど酔っていない。

いや、そもそも酔うというのを体験した事がないのだからなんとも言えないが。

目の前にいるこの男のように、気だるい感じは全くない。

「これはもう私の勝ちという事で構わないわね？」

ここの支払い。そして私の服を濡らした謝罪。どちらもやってもらうわ」

土下座はさせようかなと考えていると・・・、

「まら・・・まらら・・・っ!!」

「どうやら諦めも悪いみたいね・・・いい？認めなさい。

貴方は私に負けた。これ以上みつともない姿を晒すのはやめた方がいいわ」

「うるへえええ!!・・・まらっていったらまらなんらよ・・・やっぱり・・・」

しょうぶといえば・・・これらろ!!」

そう言つて彼が手に取ったのは、腰の後ろにさしていた剣だった。スーッと冷めたものが落ちてくる感覚がした。冷静さを取り戻していく。

「これは貴方の為に言つわ。それでは”絶対に私には勝てない”だからそんな物騒な物は早く収めなさい」

「まちのにしぐちをでるとなあ、なーんもないそうげんらひろらっているんら。

そこで・・・けっちゃくをらな!!」

そう言つて、ふらふらになりながら立ち上がる。
危なげに剣を収め、ゆつくりと歩き出した彼は、

「さきにいつれ．．．まってるから！！．．．ぜっ！．．．たい．
．に、こい！！」

そう言つて、店の外へと出て行つてしまった。
悲しい後ろ姿である。

残つたのは、少しばかりグラスに残つたお酒のみ。
それをちびちびと飲み続ける。

絶対に行つてやるもんか。

人の話を聞かないばかりか、強いのは口だけのあんな男の挑発などに
もう付き合つてやるつもりもな　、

亭主が目の前に立っていた。

なんだろうか、何かを差し出してきた。

それは数字が書かれた一枚の用紙。

「．．っ！！．．．飲み逃げっ．．．！！！！」

膨れに膨れ上がったお勘定だった。

仕方なくお金を払い、酒場を後にした。

お金を取り立てるべく街の西口へと足を運ぶ。

月が雲に隠れて辺りが暗い。

門から街の外に出て、少し歩くと一つの人影が見えた。

確実にあの男だろう。

なにやら木に片手を置いて、かがみながら何かをしているようだ。

雲から月が出てきて、明るくその場を照らした。

彼は一体何を、

「おええええ．．．うえええええ．．．うぷ．．．おえええ
ええ．．．」

月夜に照らされて見えたのは、盛大に汚物を吐いているあの男の姿だった。

今日 ? (後書き)

ちよくちよく気になさってくれる方ありがとうございます。

今日？

口元をぬぐう。

とりあえず胃の中の物が出ていったので、

吐き気と酔いがいつぺんに冷めてきたようだが……まだ物凄く
気持ち悪い。

ここに移動してくる道中、あの女とやり合う為に相棒を嵌めた辺り
から

物凄い吐き気に見舞われ、どうにかそれを抑えこもうと努力したの
だが、

もう……楽になっていいよ……ね……。

って感じで、気づいたら盛大にバーストしていた。
相棒にかからず本当に良かったと思う。

吐瀉物と酒臭さが入り混じって、とてつもない臭いを俺自信が放っ
ているのを感じる。

このままだと間違いなく自分自身の臭いで貰いゲロ……いやセル
フゲロを……、

吐き気ゲージがこれだけで30%くらいまで溜まっている感じた……
。

「えっと……大丈夫なのかしら……？」

こいつは、一体いつからいたのだろうか。全く気づかなかった。

「お酒代を取り立てにきたのだけれど・・・なんか唐突にどうでも良くなったわ。

今日の事はお互い忘れましょう・・・」

あれ？これドン引きされてね？

「うん、そうしましょう。今日は何も無かった。明日からもし街で会ったとしても

初対面と言う事で・・・後、お酒代もいいわ・・・じゃあ失礼するわね・・・」

違うんだよ、俺ってば本当に結構お酒強い方なんだよ、あれだけ飲んでケロっと

しているあんたが化けもんなんだよ。
そんな事を思った。

だけでも、この口が

「あんたが化けもんなんだよ」

最後の部分だけを発していた。

「ごめんなさい・・・良く聞こえなかったわ・・・」私が「な
んですって？」

なんだろう・・・ゲロを目撃したせいか、あんなに冷静になっ
ていたはずなのに、

一瞬にしてまた怒らせてしまっていた。

なにかトラウマ的なものもあるのだろうか。

とりあえず、俺の言葉がしっかり届いている事はわかった。

「私が・・・化け物・・・？・・・そうよ・・・私は・・・化
け物・・・」

雰囲気が先程と何か違う。

やはり地雷を・・・、

「普通と違ったら何が悪いの！？何がいけないの！？そんなに恐ろ
しい事なの！？

私だってこんな・・・こんな！！！！！」

盛大に踏んだようだった。

酷いヒステリックになってやがる。

「世の中ってね本当に上手く出来ていると思うわ。誰かが幸せだとその分何処かで

誰かが不幸になっている。貴方は幸せよね、こんな事考えたものいでしょう？」

言いたい事はわからんでもない。

確かにこの世の中は、あまりにも理不尽な事が多い。

産まれた時からその人物の立ち位置は決まっているのかもしれないけどもだ。

何処かイラつくのはこれは俺の「理」のせいなのか、それとも素なのだろうか。

「そうやって自己完結してる。世の中を勝手に恨んでろ。

だけどこれだけは言えるぜ、自分の不幸を他人のせいにしてんじやねーよ。

他人の幸せを自分の不幸の原因にしてんじやねーよ。

お前の不幸はお前だけの物で、人の幸せはその人だけのもんだ。

お前みたいなアホは、全世界の人間が不幸に陥っても幸せになんてならねーよ」

一気にまくし立てた為に、吐き気がハンパ無い。

が、言わずにはいられなかった。

こいつはあれだ、悲劇のヒロインを確実に気取っている。

「貴方には分からないわ。私の業が、私の存在する意味が！！

私の力は多くの人間を不幸にする。それなら私一人が不幸を背負えば、多くの人間が幸せに暮らしていける！これがこの世界の在り方でしょう！？」

「自分の存在する意味を自分で知ってる人間なんているわけねーよドカスが。」

ホント笑わせてくれるぜ、何か特殊な病気でもかかってるのか？お前はただ同意して欲しいんだろ？私は不幸だ。私は可哀相だ。だったらな、ねよ。自分の力が多くの人の不幸を呼び寄せるんだろ？

生きていくの辛いよな？可哀相だよな？だったら世界の為にねよ。

お前が一人居なくなれば多くの人間が幸せになれるからさ頼むわ、んでくれよ？」

「・・・・・・・・る・・け・・・・・・・・ない・・・・・・・・！」

「ああん？聞こえんぞゴミカスがっ！もっと大きな声ではっきりと言え！」

私は にますってなー！」

「出来る訳ないじゃない！！！！だから貴方にはわからないって言ったのよ！！！」

私の気持ちが！！そんな簡単に割り切れれば苦勞は ！！！」

「ふざけんな！！　ねないって事は、生きたいって事だろうが！！
何が割り切れないだ。綺麗ごとで済ませようとしてんじゃねえよ
！！」

赤の他人の為に　にたいと思ってる奴なんていないんだよ！！
誰だって自分の為に生きていたいんだ！！！！

幸せだとか不幸だとかはな、生きた過程でしかないんだよ！！！！
「！！」

「・・・・・・貴方と私は何処まで行っても平行線のままね。
何処かで”衝突”しなければ交わる事が無い平行線」

やはりこの女とは、馬が合わんらしい。

「やろうぜ喧嘩。どっちが正しいかなんてもうどうでもいいよ。俺
はお前を　、」

「貴方にこの世の理を教えてあげるわ。多くの民を戦乱に巻き込ん
だこの力　、」

「泣いても殴り続ける！！！！」「存分に見せてあげる！！！！！！」

色々まくし立て為に俺の吐き気のゲージは60%を超えていた。

あまりにも強大の力を目の前で見せられた時、人はどうなるだろうか。

俺はこう思った。

ごめんなさい。
と。

「もしかして怖気づいてるんじゃないでしょうね？」

「お、怖気づいて、ね、ねえし！！！！全然問題ねえし！！！！」

無理と。

本能の部分は叫んでいる。

やれる。

理の部分は反論する。

人は、気を留める事の出来る器だ。

多く満たす事の出来る人間は当然優秀な人であり、歴代に名を馳せている者達は

その全てが人よりも多く気を取り込む事が出来たという。

目の前にいるこの女は、人より多く取り込むというレベルを遥かに

超えている。

体に纏う気で、女の向こう側に”見えるはずの景色全てが見えない”
こんな事あるのだろうか。

視界のほぼ全てがこの女が纏っている気で覆いつくされているのだ。
正直に言おう。

俺はビビっていた。

「イニトルタモベとアンダギサタ。二つの国が大昔に始めた長き戦争。
それは流石に知っているわね？」

俺はこいつを初めて今、真っ向から見ているのだろう。

その髪はプラチナブロンドよりも輝いてるように見え、

腰まで長く伸びたストレート髪質のそれは、風ではない何かでゆら
ゆらとゆれている。

それに加え肌の色が純白のように白く、これらの要素がこの女を・
・、

「まじ非人間っ!!!!!!!!!!」

と、罵倒したくなるほど人間からかけ離れているように見えた。
というに見える。

「くっ!・・・んのっ・・・コホン!!戦争を起こした原因。
二つの国に一人づつ、とある『理』持ちの存在があったからよ。

二つの国は、その理持ちの力で国力を急激な速度で増加させていた。

両国の衝突は時間の問題だったの。だってそうでしょう？

小隣国を飲み込み、肥大させていった二つの国の国土はやがてはぶつかる。

その理の力は強大で、たった一人の力で隣国を飲み込む程のものだった。

けれども力が拮抗している二人の存在は、泥沼の戦争へと二つの国を導いた。

長く続いた戦争は、お互いの憎しみを肥大させさらに深い憎しみを生み出す。

原因となった二人が亡くなった後も、両国は戦争を続ける。

両親の仇、子供の仇、友の仇、恋人の仇、仇を討てばさらなる仇が生まれる。

どれほどの人間が犠牲になったのか想像もつかない。

そんな地獄絵図を造りだした力。それが私のこの力『傾国』。

国をも滅ぼす恐ろしき世界の理よ！！！！」

あまりにも長い説明すぎる・・・三行でまとめて欲しかった。つまりは、

昔の戦争の原因であり、

今あいつが持つ力であり、

なんかとりあえず、世界の理であると、

余裕で三行でまとめられる。

こいつは、国をも滅ぼす事が出来る力を持っている（らしい）。

それがこの通常の人間では考えられない量の気を纏っている理由なのだろうか。

確かにばかすごい気の量だが、これで国一つ滅ぼせるとは思えない。
総量で見れば1000人くらいの規模じゃ、

「とある故人が言っていたわ。『私は変身を後3回残しています』
今の私もそのようなものね。これで1割弱といったところかしら」

前言撤回である。

やはりこいつは化け物だ。

「これが私の業よ。理解出来たかしら？こんな力がある限り誰かが
悪用する。

誰かが不幸になる。私の存在は、世の中を乱すものになってしま
う」

過ぎたる力は身を滅ぼす。

という言葉があるが、こいつはその事を言っているのだろうが、
それでも、

「そんなのお前が使わなければどうという事も無いだろ。

それとも何だ、お前はその力を悪用しようとしているのか？」

「だから貴方は幸せものなのよ、本人の意思とは関係なく思い通りに
する力だって

この世には存在する。私がそれに抗えなかった場合、また戦争は

繰り返されるわ。

いいえ、実際戦争は再び起ころうとしている！貴方の知らない所で最悪の事態は
少しずつ侵攻している！何も知らないくせに強い言葉ばかり使わない事ね、

矮小に見えるわ」

「なにが何も知らないくせにだ。んなこと当たり前だろ。何処に他人の事情を精通

している人間がいるんだよ。逆に考えてみる、俺がお前の事をなんでも知ってたら

気持ち悪いだろうが！少なくとも俺はとても気持ち悪いです！」

「本っ当に！屁理屈の多い男ね、話が進まないわ。さっさと己の負けと非を認めなさい。

もう何度目かよねこれも。どうせお酒の時みたいに勝手に負けフラグを立てて

キャンキャン吼えながら逃げるのが落ちよね！」

「力を持つてゐるってのは凄いやなー、人に対してここまで高飛車になれるんだからな！

俺の妹に似てるぜお前、絶対自分の事を特別な人間だと勘違いしてる。

ふざけてんじゃねーよ、全力で地べたを舐めさせてやるぜクソがつ！」

「流石に私も学習したわよ………実力行使に出るわ」

女が腰から剣を抜いた。

普通の材質とは異なる刀身。

あれはどうみても氣留石で出来たやつだろう。

その剣を振り上げて………げっ……。

膨大な量の気をその剣に流し始めた。

気は剣を形どつていき、その大きさはみると巨大化していく。
ついでに俺の吐き気も何故かみるみる増大。

目測10mくらいだろうか。

氣留石の剣を中軸とした、一つの巨大な剣が出来上がっていた。

すごく……大きいです……。

「ま、このくらいあれば逃げられずに”潰せる”でしょ。
安心しなさい。全身打撲程度ですませるつもりだから」

「剣で潰すとか斬新すぎるだろ……。」

「カウントを5つ取るわ。0になれば同時に貴方めがけて容赦なく
振り下ろす。」

逃げようとは思わないでね、手元が狂えば死ぬわよ。

じゃ、0になるまでの貴方の行動に期待をして……5」

さてどうする。

こんなのを相手に抗えるのだろうか。

負けを認めるか？

女相手に許しを請う？

バカを言え、絶対にありえん。

「4」

じゃあどのような方法で打ち負かすか。

気の量で言えば圧倒的に不利。

カウントを取って余裕を見せてるのも、

自らが纏う気の壁が俺の攻撃を全て受けても全く問題がないとみているからだろう。

実際、あの量の気を打ち負かすだけの攻撃力は俺には無い。

「3」

終了のお知らせカウントがせまっている、ついでに俺の吐き気も極まってきた。

一応の所、俺も気を取り込んだがこの化け物からすれば雀の涙程度の物か。

活路は見出せんが、何故か負ける気がしない。

「2」

多分これが俺の理の力なんだろう。

『女相手に負ける気がしない』

くだらん力である。

気持ちでは負けないとも言わせたいのだろうか。

常に男が上で女はそれに対して一歩下がった位置にいるべき。

という考えだ。

今の世の中では、とんだ不遜な考えだ。

人格を変えてしまう力なんて恐ろしすぎるが……. によりも俺は、

口が先行して挑発的態度に出ることがとてつもなく恐ろしい。

こいつが言うように、力を伴っていない。

ただの口先野郎である。

「1」

まあそれでも。

こんな力も悪くないと思う程度には、割り切ってきた。

この力が無ければ、俺はこの場面に出くわした時どういった行動を取っていた

だろうか。

土下座していただろうか…….

いや。

この場面には出くわさなかっただろうな。

「0」

ため息と共に、剣は容赦なく振り下ろされた。
臆することなく、女を見続けた。

ズシン。
と、重低音が響く

はずだった。

「なん・・・で・・・」

と、目の前の変態仮面が仮面越しでもわかるような驚愕っぷりが認識できる。
程度には、頭はクリアだった。
というのも、

「一体なにが・・・何故・・・貴方は無傷なの・・・？」

どうやら無事なようだ。

あいつがうるたえるのも無理はない。

俺が無傷などころか、奴の剣に纏っていた強大な気も消失していたのだ。

「お・・おう・・こ、これが俺の力だ。なんかこうすげー力でお前の気をだな・・・」

つーか、俺はその10倍はうるたえている。

「相手の気を瞬時に消失させる力なんて聞いたこと無いわ。まさか貴方も理持ち・・それでもそんな理が存在するなんて聞いたことが・・・」

確かに俺も理持ちだが、この力で相手の気を消した事なんて一度も無い。

そもそも、そんな力があるのなら世界制服に乗り出すっつー・・・・・

「はあっ！！！」

掛け声で気づけば、目の前には大きな気の塊が目の前にあった。どうみても先程と同じものだった。

流石に身構えたが、寸前のところで消えてしまっていた。

「やっぱり私のミスじゃなくて何かからの干渉……？」

接触したら消えるなんてやっぱり聞いた事が……ぶつぶつ……ぶつぶつ……」

もしかしてこれはチャンスなのではないだろうか。

目の前の女はぶつぶつ言いながら完全に考え込んでいるではないか。どんな原理でこうなってるかは知らないが、とりあえずの所、あいつの気は俺に接触する度に消失している。

つまり、俺があいつに殴りかければ接触したと同時にあいつが纏っている

膨大な量の気も消失させ、直接的に攻撃が出来るんじゃないだろうか。

そこまで考えたところで笑いがこぼれてきた。

多分人生で一番あくどい顔をしているんじゃないだろうか。

即実行に移すべきである。

一気に仮面女の下へと肉薄する。

気を相棒に集中させ、走りこみと共に一気に仮面女の顔面へと、

「……ぶつぶつ……ぶつ……っ!」

叩き込まれること無く、寸前の所でかわされた。

いや、少しかすめたのか、顔面の上半分を隠した仮面が吹っ飛んでいた。

素顔が晒されたが、全くもって隠す必要を感じないくらい、

「なんだよ……てつきり物凄い傷跡とか酷すぎる火傷とか想像してたのに……」

目茶苦茶”普通”じゃねえか!!!」

「普通？……そんな馬鹿な……なんで……？……なんでそんな事

言えるの……？……一体何が……」

凄い勢いでしゃがみこんで両手で顔面を押さえながらまた、ぶつぶつと呟きだした。

なにコイツ気持ち悪い。

もうこの女には最初に感じた「あ、これ死んだかも」というのは感じられない。

ただただ気持ち悪い女だけである。

マジで吐きそうなくらい気分が悪いのでさっさとケリつけて眠りにつくでしょう。

相棒に気を集中させる。
ふりかぶる。

目の前の戦意喪失っぽい女に振り下ろすように叩き込む 重要

実に俺好みの展開である。

我・・・ここに勝利を確信せり！！！！！！

「っしゃあああ！！！！とっとおねんねしとけやこのクソおん・・・
うぶ・・・

うぶ・・・お・・・オエエエエエ・・・うぶ・・・オエエエエエ
エエエエ・・・」

ぶちまけられる吐瀉物。

その先にはしゃがみこむ仮面を無くした女。

止まらない俺の吐瀉物。

髪だけではなく、服までも汚されていつてる女。

ようやく止まった俺の吐瀉物。

ようやく立ち上がったゲ　まみれの女。

吐いた事により少し気持ちよくなった俺。

おもいつきり右手を振りかぶっている女。

覚えているのは、絶叫と物凄い勢いで振りぬかれる右の平手が、頬
ではなく

顎に直撃した事。

そこで俺の意識は完全にブラックアウトした。

今日？

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・うつつ・・・くさい・・・うつつ・・・」

涙が出そうだった。

こんな事つてあるのだろうか。

他人の吐瀉物にまみれることつてあるのだろうか・・・。

いや、現に私は吐瀉物まみれだ。

これでは私まで・・・貰いゲ・・・、

それだけは絶対に駄目だ。

とりあえず、汚物にまみれたフード付きの外套を投げ捨てた。

本当にありえない。

目の前で気絶しているこの男は、色々とありえない。

威嚇目的で少しばかり力を見せたのにも関わらず、この男は折れなかった。

そこは称賛に値するが・・・、

いくらなんでも女性に対してゲ　を吐くなんてありえるのだろうか
！！？！！！！

もう一秒でも早くお風呂に入って臭いを落としたい。
髪も酷い・・・・酷い・・・・酷い酷い臭いだ・・・・！！！！

心の底から沸いて出てくる軽めの殺意を抑えながら、
仮面を地面から拾い上げてつけながら宿屋へと急いで戻った。

夜になってから相当時間が立っていた為、開いているか心配だったが、

「あらあら、遅かったですね・・・・ってどうしたんですかそれっ
！？

それに酷い臭い・・・・お風呂をすぐに沸かしますから待っていて
くださいね！！」

手厚い対応に涙が出た。

「は・・・・極楽う・・・・」

。湯船につかりることで、臭いもイライラも取れていくようだ・・・・。
ヒノキの風呂にはゆずが浮かんでおり、この香りがまた癒しを与えてくれている。

本当にこの宿の主夫婦には頭が上がらない。

心が落ち着いてくると、やはり疑問が生まれてくる。

気を一瞬にして消失させたあのゲ 男は、一体どういった理の持ち主ののだろうか。

そしてなにより、仮面の下を見られた時のあの言葉、

『目茶苦茶普通じゃねえかよ！！！！』

ありえない発言だ。

だけでも、嘘を言っている様子は無かった。

『傾国』がもたらす力は大きく2つある。

国を滅ぼす程の大量な気を操れる力と、男女問わずに”容姿で魅了する力。”

特に男の場合、全てを投げ打ってでも自分のモノにしたいと思わずにはいられない程に

この容姿は相手を虜にさせてしまうのだ。

故に、特殊な技術が施されたこの仮面を付け魅了する力を抑えていた。

しかしあのゲ 男は私を直視したのにも関わらず、魅了を受けた様子が全く無く、

むしろ、無防備な私に対して構わず殴りかかってくるような鬼畜っぷり。

この事から導き出させる答え．．．あのゲ 男は．．．、

私の理が一切通用しない

そういう相手と言う事になる。

果たして私だけの理が通用しないだけなのか、それとも全ての理が通用しないのか、

もし、全ての理が通用しないとしたら．．．あのゲ 男は．．．、

．．．．．。

．．．．．。

．．．．．。

いやいや、今なにを考えた。

あの男は私にゲ をかけたのだ。

これは通常なら不敬罪所ではすまない。

私にゲ ．．．を．．．またいくつかお姫様レベルが下がってしまっただろう。

しかしあの力は、私が進むべき道にとって大変役に立つのではないだろうか。

いやでも．．．私にゲ ．．．を．．．、

いやでも彼は私に魅了される事がないのだから協力者としてはうってつけ．．．、

いや．．．でも．．．ゲ を．．．、

いや・でも・あの力は・、
いや・でも・いや・、

結局、またここに戻ってきてしまっていた。

あのゲ 男はまだ地面に倒れている。

恐らく気絶後、そのまま眠ってしまったのだろう。

脳内会議の末、非常に不本意・・・・・・だけでも！

このゲ 男を協力者として起用する事にした。

『甲乙の指輪』

我が国が産み出した恐ろしい技術の試作品で、それを一組拝借した物だ。

甲の指輪と乙の指輪の２つからなるそれは、二人の人間にそれぞれ嵌める事で

恐ろしい契約を結ばせる。

甲の指輪を嵌めた者は、乙の指輪を対象者に嵌める事によって二人の契約が結ばれた事となる。

甲は、自分の持つ気を使い乙の体を自在に操る事ができ、かつ、乙の持つ気は全て甲のものとする事が出来る。

こんな馬鹿げた技術をわが国は産み出したのだ。
一体どういった経路でこれを造り出したのかは不明だったが、
流石に量産する事が出来ないようで、
これを作っていた場所が判明した時点で私が潰した。
しかし、製作者までは判らなかった。

いつ何時これが私につけられるかわからない。
その為に国から一旦遠ざかる事にした、もし私の理が自在に操れる
ようになれば・・・、
考えたくもないが、この指輪が存在している以上ありえない話では
ない。
しかもこの指輪、まだ実験段階だったようで、甲側にもリスクが伴
う。

製作者もやつきになってこれを完成させようとするはずだ。
その問題もなんとかしなくては・・・。

甲の指輪を右の薬指に嵌めた。

・・・。
・・・。
・・・よし。

ゲ 男の右腕を持ち上げ、手を掴む。
乙の指輪を・・・。

・・・。
・・・。

・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・くう ・ ・ ・ ・ ・

薬指に嵌めた。

二つの指輪が光輝き、一筋の光が指輪同士を繋ぐ。
指輪がまるで脈を打っているように感じる。

これにて契約は完了である。
試しに私の気を込めてみた。

が、反応は無い。

やっぱり何かの力で私の気は打ち消されているようだ。
試しに気を奪い取ってみる。
これは反応があった。

気が身体に満ちていく。
一方ゲ 男の方は、

「うう ・ ・ ・ ・ ・う ・ ・ ・ ・ ・」

魔されていた。
いい気味である。

辺りも白んできたし、そろそろ起こして状況説明という。

「ちょっと何言ってるかわかんないっす」

「だから、私に協力しなさいと言っているの。貴方の力は正直言って使えるわ。」

人間性諸々と好きになれないし、本当は生き地獄を味あわせている所だけど

その力に免じて許してあげる。だから私に協力よ、

「断る！ろくな説明も無く、爆睡している人間に対して起きるまで顔を殴打。」

つか起きてもしばらく殴りまくってた奴に誰が協力すんだよクソが」

「貴方は本来縛り首にされている所よ？その程度で許された事に感謝しなさい。」

まあ、正直この指輪がある限り貴方に拒否権は無いのだけれどね」

そう言って手を男に向け、指輪を見せた。

「おいおいなんだそのセンスの無い指輪。おもつくそに「甲」って書いてあんど。」

マジだせー……っ
ておい
いい
いい
いい
！？
なにこれ！？
な
にこれ！？

俺の指にもなんかあんど「乙」ってなんだオイお疲れ様でしたって感じか？

こんな指輪外・・・外す・・・あれ？・・・あれ？なにこれ外れ
 ねえええええ

「なにこれもうマジうぜえええええええ」

「五月蠅いわよ黙って話を聞きなさい。その指輪は甲乙の指輪と
言つて……」

簡単に説明を終え、最後にこう締めくくった。

「悪徳商法みたいなものね」

「悪質すぎるわ！あゝもう付き合つてらんね。勝手に国でも世界でも救つててくれ、

俺はとっと帰って寝る。この国の未来はお前に託した！頑張ってくれ！」

立ち上がりながら衣服の誇りをはらっている。

そのまま立ち去ろうとしている男に私は、

「」

規約に違反するかどうかを淡々と告げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1490y/>

dual

2011年12月20日14時03分発行